

沖縄県 多良間村(宮古群島)における主婦の食生活構造

東筑紫短大 大里進子

目的 主婦は家族、食生活の中心的存在であることが見地から、渡居は各地域主婦の食生活実態を把握し改善指導の資料とするため毎年調査を行つてゐる。今回は九州大学医学部熱帯医学研究所今学期調査団に参加し、琉球離島地域食生活諸調査を行つた。本会では主婦について報告する。

方法 調査地域：沖縄県宮古郡多良間村 時期：1956年8月20日～28日 現地宿泊。項目及び方法：24時間食事調査(秤量)、身体状況調査(身長、体重、血圧測定、自覚症状による別労状態) 生活時間調査と消費エネルギー(計算単位) 食生活意識調査(アンケート式) 対象：多良間村居住10年以上主婦47名(20～50代)。調査期間中は農作業期(とうもろこし栽培、家畜世話、畑作業)に主婦作業。

結果 地区概況と食生活背景：沖縄本土より約15時間宮古群島に隔たり1離島に、人口1900人、全世帯80、主産業は農業、主産物はとうもろこし(黒砂糖輸出)である。食糧は米、いも、南瓜、冬瓜、バナナ、パパイヤ、豆(家畜)、自家製豆腐などを常食とし自給自足の傾向が強い。栄養摂取状況：栄養素はほぼ充足率100%以上。たんぱく質、脂質、ミネラルはたんぱく質の5.5:4.5、他の栄養素はCaが60%、以外はほぼ充足している。特に食品摂取の特色は、九州の半海、瀬戸内離島に比べ肉が少なく肉がまじり、とくに大豆製品摂取量は5倍(1日摂取量と対比すると+20%と多く、穀類は日摂取量-20%であった)。身体状況：70歳以上肥満傾向を示す16名中+20%以上で、うち老年令子の肥満傾向にある。男女別労状態は、農作業期は、男女別労状態は、農